

保育者のソーシャルワークに関する意識調査からの一考察

杉野 寿子*

要旨 保育現場において、子どもや家庭の多様化・複雑化した問題に対応する必要性が高まってきた経緯から、保育施設や保育者の役割としてソーシャルワーク実践が求められるようになった。本研究では、保育現場の現職保育者がソーシャルワークについてどのように認識しているのかについて調査し、その結果をもとに考察し課題をまとめた。調査の結果、ソーシャルワークの認知度は約4割であること、年代および経験年数によりその認知度に相違があることなどがわかった。ソーシャルワークを意味する自由記述では、援助、支援、サポートというキーワードが多かった。多くの保育者がソーシャルワークを専門的に学んでいるわけではない現状において、保育分野でのソーシャルワークを求められながら苦勞している保育者に対して、自信をもって実践してもらえるよう、どのようにアプローチしていくのが課題となる。

キーワード 保育者 ソーシャルワーク 保育ソーシャルワーク 意識 認知 エンパワメント

1. 研究の背景

社会の変化とともに子どもや家庭を取りまく環境の変化にともない、保育施設や保育者の役割としてソーシャルワークスキルの獲得やソーシャルワーク実践が求められるようになり、その必要性について研究も進んできた。1990年代後半以降、保育領域において保護者支援・子育て支援を新たな機能として位置づける保育ソーシャルワーク論が展開され始め（伊藤2011）、2013年には保育ソーシャルワーク学会が設立し、近年研究が進められている。ただ、保育ソーシャルワークのシェーマ（定義、内容、

方法等）やシステムについて、いまだ確定したものが構築されるには至っていない（保育ソーシャルワーク学会）。伊藤（2011）は、保育ソーシャルワークの課題として、保育ソーシャルワークの概念を明確にしていくこと、保育ソーシャルワークが対象とする領域とその内容について整理すること、保育ソーシャルワークを担う主体は誰か・どこか・その対象を設定することを挙げている。山本（2014）は、これまでの保育ソーシャルワーク関連の研究を概観したうえで、保育ソーシャルワークの実践における共通の視点として、子どもと保護者の生活全体性をとらえることを挙げ、既存のソーシャルワー

* 福岡県立大学人間社会学部・准教授

ク理論のモデルやアプローチを保育実践に応用することもできると考えられ、今後は現場実践で活用できる手段の検討、開発も必要とされ保育者のアセスメント力の向上が不可欠であるとされている。

一方、保育現場においても、子どもや家庭の多様化・複雑化した問題に対応する必要性が高まってきた経緯から、子どもへの直接的な保育以外に、保護者、家庭、地域などに対応しながら、ソーシャルワークといえる実践が少なからず行われている。だが、筆者が保育現場で出会う保育者の多くが、ソーシャルワークという専門的な響きに負担を感じながら、ソーシャルワークを求められても具体的に何をしなければいけないのかについて曖昧なままとなっているために戸惑っている状況がある。

そこで、保育者がソーシャルワークをどのように認識しているのかをある程度明らかにしたうえで、改めて保育者にとってのソーシャルワーク実践の課題を挙げ、今後の保育ソーシャルワークの展開につなげていきたいと考えた。もしも、保育者がソーシャルワークを知らない場合、もしくはソーシャルワーク実践とはいったい何をさすのか理解していない場合は、本人がソーシャルワーク的な行為や行動をしている、本人はそれに気づかないであろう。清水（2012）は、「ソーシャルワークとは、ソーシャルワークの専門的方法・技術に関する知識やそれを用いての実践活動であり、ソーシャルワーカーはそれぞれの場面で自身の行為がソーシャルワークの目的に沿ったものかを常に確認する必要がある」とし、「ソーシャルワーカーはソーシャルワークの目的のもと、一定の視点を身につけ、特定の働き（機能）を行うことが求められている。それによって自己のあり方が

決まるということである。（略）『自分の外』にある（法則的）技術論が存在し、それをどこまで正確に理解するかがワーカーの中心課題となる。」とする。つまり、ソーシャルワークはソーシャルワークの目的に沿った実践であり、仮にソーシャルワークの目的や機能を理解していない行為は、ソーシャルワークとは言えないのではないかとも言い換えられるのではないか。実践者自身がソーシャルワークを理解していること、自身の実践がソーシャルワークの目的、知識や価値に沿ったものだと意識することで、実践にソーシャルワークの意味をもつのではないだろうか。そのことによって自身のソーシャルワークのスキルも深まり、自身のエンパワメントにつながる。

再び保育者の実践に戻して考えると、保育者がソーシャルワークを知らず、理解していない場合は、いくら保育現場でソーシャルワークが求められ期待されようと、保育者は何を行えばよいのか戸惑うばかりとなる。丸目（2015）は、保育者を対象にしたある調査において、保育ソーシャルワークという概念に対して、全ての保育士が共通したイメージを持っているわけではなく、一部のソーシャルワークの文言や概念に対する理解が難しいことが想定されることから、ソーシャルワークという表現そのものを用いていない。

もちろん保育現場でソーシャルワークの必要性が高まっているとはいえ、保育者にソーシャルワーカーと同じ程度や範囲のソーシャルワーク実践が求められているわけではない。その一部を担うことで子どもや家族、地域に対する支援に貢献できるのである。このような経緯から、保育者のソーシャルワーク実践を意義あるものとするためにも、保育者のソーシャルワー

クに対する意識について調査することとした。これまで保育者に対するソーシャルワークの意識に関する先行研究は見当たらなかった。

2. 研究の目的

本研究では、認可保育所および認定こども園の保育者に対して、ソーシャルワークを知っているのか（ソーシャルワークの認知）、そしてその認知については属性によって違いがあるのか、またソーシャルワークをどうとらえているのかについて調査し考察することを目的とする。この結果を今後の保育者のソーシャルワークに関する知識やスキルの理解や実践につなげていく一助としたい。

3. 研究方法

① 調査の対象

A市がホームページで公開している市内の認可保育所および認定こども園（合計98施設）に勤務する保育者（各保育施設5名、1カ所は3名・合計488名）を対象に、無記名自記式質問紙調査を実施した。

調査期間は、2017年8月5日から2017年9月5日までの1ヶ月間とし、A市すべての認可保育所・認定こども園に調査票と返信用封筒を郵送した。保育者が直接回答し、調査票の返送については、各回答者が個別に投函するよう依頼した。251名から回答が得られた（回収率51.4%）。

② 調査の方法

調査では、(A)ソーシャルワークの認知を4つの間隔尺度で質問し、(B)知っている場合に

は、ソーシャルワークをどのように捉えているのかについてその内容を自由記述する形式とした。得られた回答を、(A)については単純集計とともに、性別、年代、経験年数によるクロス集計を行った。(B)については、それぞれの内容についてキーワード化を行い、類似する概念をまとめた。

4. 倫理的配慮

調査実施にあたり、調査を依頼した施設の施設長と保育者（回答者）へ文書にて、調査概要について説明を行うとともに、調査への参加は自由であること、個人が特定されないこと、調査結果は学会等で公表すること等を記した。施設長には調査協力の同意書を返送してもらい、回答者には調査票の返送により同意とみなすと記した。なお、施設長から回答者個人へ回答及び返送が強制されることを避けるため、施設ごとに回収して返送するのではなく、個人の有志により個別に返送してもらうこととした。

5. 調査結果

(1) 基本属性

基本属性について表1に示す。「性別」は、男性4.8%、女性95%であった。「年齢」は20代40%、30代26.3%、40代16.7%、50代14.3%、60代以上2.4%であった。「保育者経験年数」は3年未満15.5%、3～6年20.7%、7～9年12%、10～14年16.7%、15～19年14.3%、20年以上19.9%であった。「最終学歴」は、高校2.4%、短大・専門学校87.3%、大学9.6%であった。「資格・免許」は、保育士96.4%、幼稚園教諭87.3%の所持率であった。

【表1】基本属性

項目	カテゴリー	度数 (%)
性別	男性	12 (4.8)
	女性	238(95.0)
年代	20代	99(40.0)
	30代	66(26.3)
	40代	42(16.7)
	50代	36(14.3)
	60代	6 (2.4)
経験年数	3年未満	39(15.5)
	3～6年	52(20.7)
	7～9年	30(12.0)
	10～14年	42(16.7)
	15～19年	36(14.3)
	20年以上	50(19.9)
最終学歴	高校	6 (2.4)
	短大・専門	219(87.3)
	大学	24 (9.6)
資格・免許	保育士	242(96.4)
	幼稚園教諭	219(87.3)

(2) ソーシャルワークの認知についての実態

ソーシャルワークの認知について、結果を表2に示す。「a.知っている」が全体の7.9%、「b.なんとなく知っている」が30.7%、「c.聞いたことがあるが分からない」が54.2%、「d.まったく分からない」が3.2%、未回答4%であった。「a.知っている」「b.なんとなく知っている」の合計が38.6%、「c.聞いたことがあるが分からない」「d.まったく分からない」の合計

が57.4%となった。過半数がソーシャルワークとは何かについてあまり分かっていないことが明らかとなった。

これらを、性別、年代、経験年数ごとに表示したのが表3である。これを元にクロス集計を行ったが、間隔尺度のa・b・c・dは、aおよびbを「知っている群（以下、知っている）」に、cおよびdを「分からない群（以下、分からない）」とし、カイ二乗値検定を行った。性別による結果に有意差は認められなかった。年代別による結果は、有意差が認められた ($p < 0.01$)。ソーシャルワークを「知っている」・「分からない」には年代に関係があり、20代と30代で「分からない」が多く、40代以上では「知っている」のほうが多くなることが明らかとなった。保育者としての経験年数による結果には有意差が認められ ($p < 0.01$)、ソーシャルワークを「知っている」・「分からない」には経験年数に関係があることが示された。経験年数が10年未満では「分からない」が多く、経験年数が10年を越えると「知っている」のほうが多くなることが分かった。

(3) ソーシャルワークについての自由記述

ソーシャルワークの認知について、「a.知っている」もしくは「b.なんとなく知っている」を選択した場合、ソーシャルワークとはどの

【表2】ソーシャルワークの認知

	回答項目	度数 (%)
知っている群	a.知っている	20 (7.9)
	b.なんとなく知っている	77 (30.7)
分からない群	c.聞いたことはあるが分からない	136 (54.2)
	d.まったく分からない	8 (3.2)
	N.A	10 (4.0)

【表3】属性ごとの集計

属性	カテゴリー	知っている群 (%)	分らない群 (%)
性別	男性	2 (18.2)	9(81.8)
	女性	95 (41.5)	134(58.5)
年代	20代	20(20.41)	78(79.6)
	30代	30 (45.5)	36(54.5)
	40代	23 (57.5)	17(42.5)
	50代	21 (67.7)	10(32.6)
	60代	3 (60.0)	2(40.0)
経験年数	3年未満	6 (15.4)	33(84.6)
	3～6年	14 (27.4)	37(72.5)
	7～9年	9 (31.0)	20(69.0)
	10～14年	22 (55.0)	18(45.0)
	15～19年	18 (51.4)	17(48.6)
	20年以上	27 (37.5)	45(62.5)

ようなことか自由記述してもらった。該当者97名のうち、92名からの回答があり（回答率95%）、それら92の自由記述の内容に含まれたキーワードを分類し、カテゴリー化を行った。表4は自由記述の例で、表5は自由記述をカテゴリー化したものの割合を示す。一人の記述の中に複数のキーワードや意味が含まれているものもあるため、その場合は複数のカテゴリーに当てはめている。

まず、各記述は、大きく3つに分類できた。「言い換え」としての用語を記述しているもの、ソーシャルワークの「対象」として記述しているもの、「具体的な行為」を記述しているものである。「言い換え」としての記述では、例えば「社会福祉」「社会的な福祉」「社会福祉事業」などで、全体の7.6%であった。「対象」としての記述では、「困難を抱える人」が41.3%、「保護者」が31.5%、「子ども」が5.4%、「地域」が4.3%であった。次に、「具体的な行為」としての記述は、「援助、支援、サポート」が70.7%、

「相談」が38.0%、「問題解決」が21.7%、「社会資源の活用」が14.1%、「心理・精神的ケア、カウンセリング」が9.8%、「助言」が8.7%、「他機関との協働」が7.6%、「専門知識（がある）」6.5%、「環境改善」が3.3%、「寄り添う、一緒に〇〇する」が3.3%であった。少数キーワードには、「危機対応」や「代理手続き」「ニーズを聞く」なども複数見受けられた。

6. 考察と課題

(1) ソーシャルワークの認知度約4割

本調査の結果から、ソーシャルワークについて「聞いたことがあるが分からない」「まったく分からない」と回答した保育者が57.4%だったことから、ソーシャルワークは、約6割の保育所等の保育者にはほとんど知られていないことが示された。さまざまな背景の中で保育現場でのソーシャルワークが求められている状況を考えると、改めて保育現場におけるソーシャル

【表4】自由記述の例

(原文のまま)

保護者の抱える問題解決のための相談支援
利用者に対して適切なサービスが受けられるようにコーディネートし、代理手続きを行ったりする。
家庭が抱えている問題 (ex:貧困、暴力) に取り組む行為のこと
相談援助、相手の気持ちを受けとめ、次につなぐ手助け
子育てに関する保護者、地域の子育ての援助・支援をすること
子育て支援、人間形成
家庭と社会をつなぐ役割を行うこと。例えば、発育に悩みのあるお子さんをお持ちの方を専門機関につなげること。
色々な不安や困りを抱えている保護者や、子どもたちに対して支援していくこと。
身体的障害、知能障害な子どもに対して、保育園で幸せかつ楽しめる様な活動や声かけ、支援を行い、色んな体験をさせ、共に成長させられることを目指している。
特別な配慮を必要とする子どもや親への兆候に気付いたり、相談にのり他機関と協働したりその子どもや親の環境を改善していけるよう支援していくようなこと。
子育て等に対する相談や助言など子どもと保護者のかかえる問題解決のため、保育士や専門分野(社会福祉士)が相談支援を行うこと
生活する上で生活に不安をもっている人に(身体的・精神的)ケアをする事
日本語では社会福祉援助技術。社会的な利益(貧困)などに対して、幸福やセキュリティを向上させ、身体的・精神的な障害に対して心理社会的ケアを提供する。
直接的に介入し、アプローチしていく取り組み。心理的にも支援していく。
子育てにおける支援(コーディネーターにおけるアドバイス)などをし、協働して取り組んでいく
社会的不利益者に対して援助を行なう
社会的な問題、課題を、より良い方向に援助する。社会福祉の実践(活動) ※ネットワークを利用しながら
相談援助。保育現場でのソーシャルワークとは、保護者の子育てに対する相談や助言をすることで、問題解決できるように相談支援すること。
公共福祉など、一人ひとりに応じたお手伝いのこと

【表5】自由記述のカテゴリー化

	カテゴリー	数(%)
言い換え	社会福祉ほか	7(7.6)
対象	課題などを抱える人	38(41.3)
	保護者	29(31.5)
	子ども	5(5.4)
	地域	4(4.3)
具体的な 行為	援助、支援、サポート	65(70.7)
	相談	35(38.0)
	問題解決	19(21.7)
	社会資源の活用	13(14.1)
	心理・精神的ケア、カウンセリング	9(9.8)
	助言	8(8.7)
	他機関との協働	7(7.6)
	専門知識(がある)	6(6.5)
	環境改善	3(3.3)
	寄り添う、一緒に～	3(3.3)

ワークの意味や意義を浸透させていく必要性が浮き彫りとなった。

調査では、あえて「ソーシャルワーク」という用語を使い、その認知状況の把握を目的とした。もしも、ソーシャルワークに近い意味での和訳、例えば「相談援助」や「社会福祉援助」等を用い、その認識を調査すると、異なる結果となることも予想されたが、国際基準で理解されるソーシャルワークの一部が保育者に求められているという前提のもとで、「ソーシャルワーク」を用いた。

いまだ日本では、一般に日常生活のなかで、医療や福祉などの分野以外ではソーシャルワークという言葉を目にするのが少なく、ソーシャルワークやソーシャルワーカーの仕事についてあまり理解されていないといえる。古野（2014）は、国際ソーシャルワーカー連盟（IFSW）のソーシャルワークの定義から、ソーシャルワークは①実践を通して人間の福利を図ることを増進する、②実践を通して人間関係における問題解決と社会の変革をはかる、③実践を通して人々のエンパワメントと解放を促す、④ソーシャルワークの視点は、人と環境の相互作用にあり、その実践は人と環境の相互作用に介入する、⑤人権と社会正義という価値を実践の拠り所とする、と整理している。

ソーシャルワークは社会にとって大切であるとのイメージがあるものの、プロセスを重視しながら実践するため、そのプロセスが明確に目に見えにくいともいえる。そのため、保育者にとってもソーシャルワークを聞いたこと、学んだことがあったとしても、その内容や実態が見えにくく分かりづらいという感覚となり、「聞いたことがあるが分からない」の回答が過半数を超えたのではないかと考える。

（2）年代および経験年数とソーシャルワーク認知度との関係

調査結果より、40代以上および経験年数が10年以上になるとソーシャルワークの認知度が高くなっている。言い換えれば、ソーシャルワークが「分からない」保育者は、年齢が若く、経験年数が比較的短いとされる。これらの保育者は、40代、50代の保育者よりも、子育て支援や相談援助等に関する科目や教授内容が若干多くなった保育士養成課程で養成教育を受けてきていることを考えれば、年代の高い保育者よりも養成校時代にソーシャルワークという文言や内容について触れる機会も増えているため、年代の低い保育者のほうが認知度の高い結果が出るのではないかと予測もできたが、反する結果となった。

一方で、保護者を含めた子育て支援が保育者の役割であることから、現任の保育者が子育て支援などに関する研修へ参加する機会が増えてきていることを考えると、年代が高く経験年数の長い保育者ほど、保育とソーシャルワークとの関係について聞き慣れているのかもしれない。

このことに関連し、今回の結果で気になる点がある。それは、ソーシャルワークの認知の質問に対し、10名が未回答となっており、その10名のほとんどは経験年数が長く、年齢も高いということである。この10名の経験年数は、20年以上が5名、10年以上が3名、7年以上と3年以上が各1名となっている。また、年代も50代以上が6名、40代が2名、30代が1名、20代が1名である。なぜ経験年数の長い保育者が、未回答となっているのか。前述したように、経験年数の長い保育者ほど、ソーシャルワーク関連の情報を持っている可能性が高いことから、

ソーシャルワークを知らないとは回答しづらく、未回答のままになったとも考えられる。

いずれにせよ、年代の低い保育者ほどソーシャルワークの理解が低いという結果から、今後さらに保育士養成課程におけるソーシャルワーク教育や、新任保育者へのソーシャルワーク研修などをさらに充実していくことが求められる。

(3) 保育者の認識と実践、保育者へのエンパワメント

保育者のソーシャルワークに対する認知が半数にも及んでいないという結果が出たが、果たして実際に保育者はソーシャルワーク実践を行っているのだろうか。例えば、保護者から家庭での子どもの様子を聞く、家庭の状況を考慮しながら子どもや保護者と関わる、保護者からの相談に応じ助言を行う、連絡帳で保護者の気持ちを知り時には励ます、気になる子どもの発達などについて個別相談に応じる、子どもや家庭に必要な保育サービスの情報を知らせる、などは多くの保育者が実践しているのではないか。これらはソーシャルワークのような実践に見える。そうとらえると、「保育者はソーシャルワークのことはあまり理解していないが、ソーシャルワークのような実践は行っている」という仮説が立てられる。ただ、上記の実践例はソーシャルワークの理念や価値、原理原則に伴ったものかと問われると、簡単に肯定はできない。

しかしながら、ソーシャルワークを知らないにもかかわらず、ソーシャルワークの理念や価値等に伴った実践を行っている可能性はある。ソーシャルワークの理念や価値等は、人権の尊重や社会正義など、人間を大切に尊重するとい

う人間観や倫理観が根底にあり、このことは保育者一人ひとりが持っている専門職価値観と共通する可能性もあることを考えれば、保育者によっては、ソーシャルワークの理念や価値等と同等の理解をしながらソーシャルワーク実践をしていると考えられる。

そうであるならば、多くの保育者に、「自分で認識していないかもしれないが、あなたはソーシャルワークといえる実践をすでに日々行っている」ということを伝え、自信を持ってもらうことが重要である。すでに実施している行為や考え方がソーシャルワークに匹敵することを知覚することで、それまで異分野のものとなっていたソーシャルワークが身近なものとなるとともに、自分の自覚した行為を振り返ることで具体的なソーシャルワーク実践をイメージできる。そのことが実際にソーシャルワーク実践へとつながるであろう。保育者の研修等では、「ソーシャルワーク技術の向上を目的とした研修」も必要だが、同時に「ソーシャルワーク意識の顕在化を目的とした研修」の実施も重要だと考える。その顕在化のなかで、自身の保育実践にソーシャルワークが含まれていることを認識できるよう保育者へエンパワメントアプローチを行っていくこと、それが保育者の実践力の向上につながるといえる。

(4) 何らかの困難を抱える人への支援というイメージ

ソーシャルワークについての自由記述の結果では、ソーシャルワークの対象を子どもや保護者のみに限定しがちではあるものの（約4割）、「何らかの困難を抱える人への支援」など、保育分野に限らずすべての人を対象とした回答も同程度あった（約4割）。保育者を対象とした

調査のため、子どもや保護者を対象にした回答が大半なのではないかと若干予想したものの、対象や分野を限定しないジェネラルなソーシャルワークととらえていることは、ソーシャルワークの基礎的理解として望ましいのかもしれない。ただ、92名の回答の中には、単語一つを記載しているもの、単語を複数並べているものなどが2割程度あったため、どのような意味でとらえているのか伝わりづらい部分もあった。今後はこのアンケート調査を参考に、インタビュー調査や参与観察による調査を行い、保育者の具体的な認識を把握していくことで、認識度と実践のギャップを縮小させていくことも必要だと考える。

7. おわりに

保育者がソーシャルワークについて曖昧な解釈のままになっているという現状を理解したうえで、今後保育現場で保育者にどのようにソーシャルワーク実践の一部を担ってもらうのか、また求めていくのかについて再検討していかなければならない。また、各種現任研修や、保育士養成校におけるソーシャルワーク教育のあり方についても、この調査結果は基礎資料となり得る。筆者は本稿に取り上げた調査のほか、保育者が実際にどの程度ソーシャルワーク実践を行っているのかの調査もすでに行っているため、引き続き、保育者のソーシャルワークに関する意識と実践についての分析を続け、保育者へのエンパワメントにつなげたい。

本稿では詳しく分析していないが、保育者の最終学歴とソーシャルワークの認知との関連について少し触れておく。全回答者のうち短大・専門学校等（以下短大等）卒が9割弱、大学卒

が1割弱で、短大等卒の場合は「知っている」が4割、「分からない」が6割だったのに対し、大学卒の場合は「知っている」が6割、「分からない」が4割という結果だった。「知っている」と「分からない」の割合がそれぞれ反転状態となっている。保育士養成課程のカリキュラム基準は大学・短大等ともに同じであるにもかかわらず、このような差が示されたことは、大学の場合は設置基準の告示科目以外の教養科目などを多く受講することにより教養的にソーシャルワークを知る機会が短大等よりも多いこと、また保育士養成課程を設置している大学には社会福祉士および精神保健福祉士などソーシャルワーカー養成の課程を設置している可能性が高いことから、保育を学ぶ学生にその影響があるのではないかと考えられる。これまで、2年制の保育士資格と4年制の保育士資格の差別化（機能分化）について議論がされてきたが、改めてこの点について検討することも必要なのではないか。大学での保育士養成課程では、ソーシャルワークなどの内容を拡充させ、保育現場において保育ソーシャルワークをリーダー的に実践できる保育士（上級保育士にあたる保育専門職）を養成できるようにするということも考えられる。また、児童福祉施設に位置付けられている保育所や幼保連携型認定こども園で社会福祉士の配置を進めることも今後検討されていくであろうが、それに伴い、社会福祉士養成における相談援助実習の実習先として、保育所と幼保連携型認定こども園も加えていくことも考えられる。そのことで、保育者一人ひとりの業務負担を軽減し、保育現場のソーシャルワーク実践の浸透や展開につながるのではないだろうか。

最後に、2019年度より保育士養成課程（厚

生労働省 2017) が改正されスタートする予定となっているが、検討されている新課程では、子ども・子育て支援新制度の施行や子育ての負担や孤立感の高まり、児童虐待相談件数の増加などの背景により、いくつかの見直しが見直されている。その中で、見直し後の科目名や教授内容に「子育て支援」や「子ども家庭支援」の用語は目立つものの、これまでの「社会福祉援助技術」や「相談援助」、「社会福祉」と「保育相談支援」の一部において強調していた普遍的なソーシャルワークに該当する部分がほとんどなくなっていることは、社会全体、人の生活全体に視野を置いたソーシャルワークの価値について教授できなくなってしまうのではないかと危惧する。今後も保育士養成課程の動向にも注視していきながら、保育ソーシャルワークの理解と実践について展開を期待したい。

謝辞

本研究の実施にあたり、アンケート調査にご協力いただいたA市の認可保育所と認定こども園の保育者の方々、およびA市保育部会事務局の方々、さらに本研究に際して適切なお言葉をいただいたふたば保育園の吉田茂園長と佐藤陽子副園長に心より感謝申し上げます。

本稿は、平成29年度福岡県立大学科研費申請補助制度の助成を受けて実施した研究結果の一部である。

文献

- ・厚生労働省 (2017) 「保育士養成課程等の見直しについて (検討の整理)」
<http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-11901000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Soumuka/0000187110.pdf> (2018年4月26日アクセス)
- ・清水隆則 (2012) 『ソーシャルワーカー論 人間的考察』川島書店, pp.7-9.
- ・古野愛子 (2014) 「相談援助の視点」『児童家庭福祉の相談援助』建帛社, p.6.
- ・保育ソーシャルワーク学会ホームページ <https://jarccre.jimdo.com/> (2018年4月20日アクセス)
- ・丸目満弓 (2015) 「保育ソーシャルワークのツールとしての連絡帳活用の可能性について」『保育ソーシャルワーク学研究』創刊号
- ・山本佳代子 (2014) 「保育ソーシャルワーク研究の動向と課題」『保育ソーシャルワークの世界』日本保育ソーシャルワーク学会編, 晃洋書房, pp.4-5.
- ・伊藤良高 (2011) 「保育ソーシャルワークの基礎理論」『保育ソーシャルワークのフロンティア』伊藤良高・永野典詞・中谷彪編, 晃洋社, pp.11-14.